

土佐のわらべ

《第531回(2026年1月8日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:9人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア4階会議室

『空はみんなのもの』 ジャンニ・ロダーリ／文、関口 英子／訳、荒井 良二／絵 ほるぷ出版

1月の読書会は、絵本『空はみんなのもの』を読みました。イタリアの作家ジャンニ・ローダーリが約60年前に書いた詩を、翻訳家の関口英子さんが日本語へ訳し、絵本作家の荒井良二さんが絵を描いて、できあがった絵本です。世界中で争いが起こっている今、多くの人の心に届いて欲しい一冊です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●そうだよなあと思いながら読んだ。絵がすてき。海外の作家と日本の画家のコラボもあるんだなと思った。すてきな人はすてきな人と組んで良い仕事をしている。この絵本は、特に今だから感じるところがある。読書会をとおして、すてきな本に出会えてよかったです。

●『キーウの月』(講談社)で、ジャンニ・ロダーリに注目していて、それに荒井良二が絵を描いているということで手に取った。いろんな空の色、立場の違う人の目線、すてきな絵本と思って読んでいたら、最後にズシンときた。ショックだった。心は痛むが、たくさんのこと들을伝えてくれる絵本。

●絵がすばらしい。幼い子は自分の手に触れるものから疑問を持つ。どこまで理解できるか分からぬといが、この本を読んで芽生えた問ひが、その子を育てるきっかけになるといい。空はベネズエラの赤い空とつながっている。世界はどうなっていくのか。改めて平和の大切さを感じた。

●コロナのときの、飛行機も飛ばない静かな空を思い出した。変わっていく空の色に、荒井良二の絵のを感じた。最後がとても切なくなった。子どもたちに読んでも十分伝わると思う。荒井良二のタッチの力強さと色彩が良い。裏表紙のような、幸せな日々が過ごせると良い。

●詩集のよう。シンプルだからこそ、胸を打つ本。空も海も大地も誰のものでもない。誰のものかという所有権の話をして欲しくない。今は世界中で所有権を争っている。主人公の設定が気になった。争いが近づいてきている場所にいるのか。荒井良二の絵がすばらしく、文章を引き立てている。

- 絵に筆の跡がそのまま残っている。あまり絵本は読まないが、想像したり、見比べたりしながら読むのは楽しかった。今は空にも境目ができる。それぞれの場所から見る空のことを考えた。ビルの多い街に住んでいる子どもは、あまり空を見ることがないのではないか。

- 最初に書かれている言葉は、私たちみんなに問いかけてくる。「ものしりなひと」に聞きたいわけではなく、みんなで話し合おうということ。今大切なことは対話。もっと積極的に相手のことを聞く姿勢が必要。空はみんなのものだけれど、自分のものもある。対話をしながら共有することが大事。

●約60年前に書かれた詩が、なぜ今、日本で絵本になったのか。この詩は時代を越え、平和や平等を問いかけてくる。なぜ大地は境目だらけなのか。私には答えられない。人間はなぜ愚かなことを繰り返すのか。荒井良二のいろいろな空の絵がとても良く、詩も絵も印象的な本。

●直接的に戦争のことを語っていないからこそ、平和について心に語りかける絵本。荒井良二の空の絵が美しく、明るい色の空は、後半になると紛争地域の煙が上がる空になる。「空はひとりひとりの目にどこまでもひろがる」「けつしてたりなくなることなんかない」という文章が好き。焦らなくても、空のかがやきは薄れない。

次回 2月12日(木)10:00~11:30 オーテピア4階集会室

『リトル・トリー』 フォレスト・カーター/著、和田 究男/訳、藤川 秀之/挿画
ゆるくまーる ※申込み・参加費は不要です